



すべての人が、幸せになる権利を持っています。
人権について、身近なこと、小さなことから、始めませんか？

全盲のピアニスト

全盲のピアニスト辻井伸行さんのコンサートに行く機会がありました。今回のコンサート会場は、中央にステージが設置され、観衆がステージを取り囲むように配置される形式で、アーティストと客席の一体感を高める演出となっていました。

辻井さんは、ガイドヘルパーの肘をそっと持ちキリッとした表情で入場し、椅子に座り鍵盤を確かめるとすぐに演奏を始めました。

辻井さんの細かいタッチで滑らかな、そして感情の入った演奏に観衆は惹きつけられ、ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで日本人初の優勝を果たした曲「ラ・カンパネラ」などの曲を弾き終わると、会場は「ブラボー」の声とともに万雷の拍手が鳴り響きました。辻井さんは、4方向に丁寧な深いお辞儀をして控え室に戻りました。演奏中の豊かな表情に比べて、この時の表情に優しさを感じました。

その後、拍手が鳴り止まない中で登場し、アンコールに応じて曲を披露し、最後に登場したときは、「ごめんね」といった表情でピアノの鍵盤蓋をそっと閉じてコンサートは終了となりました。その表情が今でも目に浮かびます。

私自身、今までに参加したコンサートの中で一番感動し、ほっとした温かいものが残ったコンサートとなりました。

今回のコンサートでは、辻井さんの演奏だけでなく、表情・所作から豊かな人間性を感じることができました。それは、今までに家族をはじめとする辻井さんに関わってきた多くの人たちとの関わり方を想像できるものでした。

辻井さんがインタビューで語ったことで印象的なのは、「母は、僕が幼い頃から目が見えないのに美術館に連れていって、絵についてたくさん説明してくれました。今思えば、こういうことを経験させてもらったのが大きかった」ということです。このことにより辻井さんの想像力が広がったのではないのでしょうか。

さて、視覚に支障のある方のうち全盲者とのコミュニケーションで大切なことは、相手に「名前を伝える」「話しかけるときは触れる」「常に触れておく」「状況や説明は言葉で詳しく伝える」「離れる際は伝える」「会話を止めない」等があげられます。きっと辻井さんの周りで支援してきた人たちもこのようなことに気をつけて辻井さんに関わってこられたのではないのでしょうか。

今、社会では、全盲でなくても、弱視、緑内障、白内障など生活する上で視覚に支障を来しておられる方がおられます。共生社会の実現に向けて、支援を必要としておられる方に積極的に声かけのできる社会であって欲しいと願っています。